

## コラム

# 安倍晋三元首相殺害事件に思う

小林寿太郎

参院選の最中、安倍晋三元首相が奈良市で、手製銃で殺された事件は歴史的大事件である。安倍氏を賛美して神格化する動きが強まり、批判や風刺を許さないという雰囲気を作られている。

朝日新聞の朝日川柳が早くもやり玉に上がっているが内容は死者を誹謗、中傷するものではなく、あくまで軽い風刺である。「付度はどこまで続くあの世まで」、など7首である。

ところが小川榮太郎という安倍氏の忠臣として有名な評論家が、これらの川柳についてひどく憤慨している。「私はこれを見て腹が立つより正直言って死にたくなりました。これほどの不正義に対して誰も全身全霊で怒ろうとしない」などと嘆いているが、小川氏の言いは正当だろうか。

歴史的に考えると、川柳は江戸時代中期に柄井川柳が政治批判も含めた風刺としてはじめた。桜田門外の変で殺された井伊直弼に関連した川柳はかなり強烈である。近江彦根藩主であり幕府の大老であった直弼は、日米修好通商条約調印を強行して反対派には安政の大獄と呼ばれる弾圧を加えた。

このため桜田門外で水戸浪士に討ち取られ首級をあげられた。この事件を詠んだ川柳、「人參で首をつなげとの御沙汰かな」、というのがあるが説明が必要である。大名家などは後継者が確定する前に主君が他界した場合、その家は断絶することになっているので、井伊家は断絶することになる。

しかし直弼は大老としての幕府のために職務を遂行している過程で死亡したので労働災害である。幕府も考慮して、彦根藩の後継者確定が終わるまでは直弼は負傷しているが生きていることにして、お見舞いとして朝鮮人参を贈っている。

江戸の庶民は直弼が討ち取られ首級をあげられたことは周知なので、朝鮮人参で首をつなげということだという川柳が流布した。瓦版にも強烈な記事がある。

襲撃現場の中央には牛の首が転がり、川柳が2首、詠まれている。「食べ物の恨み恐ろし雪の朝」、「大老が牛の代わり首切られ」。これらを説明すると、水戸藩主、徳川斉昭は近江牛の牛肉が大好きで彦根藩から牛肉を取り寄せていた。

ところが日米修好通商条約をめぐる徳川斉昭は直弼と対立が深まり、直弼は水戸藩に牛肉販売を禁止した。徳川斉昭の直弼への怒りは水戸藩士にも伝わり、ついに脱藩浪士によって直弼は襲撃され現場には牛の首が転がった。権力者が厳しい批判や風刺にさらされるのは江戸時代も現代も同じだと思う。